

「トランスジェンダー」の旅路

スーザン・ストライカー（アリゾナ大学／イェール大学）

翻訳：山田秀頌（東京大学大学院）

はじめに

トランス、クィア、そしてフェミニズムのコミュニティに数十年にわたり属してきたトランスジェンダー女性として。学際的な学問領域であるトランスジェンダー・スタディーズの発展という役割を担ってきた人間として。そして長年にわたり、いくつもの大学の女性学やジェンダー／セクシュアリティ・スタディーズの学科で教えてきた研究者として、私はトランスジェンダー、フェミニズム、そしてクィアという視角がお互いに親戚関係にあることを、私たちがたくさんつながりや、非常に大きな土台を共有していることを、とてもよく知っています。一方で私は、時にトランスの人々、クィアの人々とフェミニストの人々が問題を抱えた機能不全の家族で、外的な困難に悩まされていることも、知っています。私たちの多くは傷つけられていると感じています——世界が私たちをこんなふうに扱ってきたことによって。国家と政治経済が私たちをこんなふうに分断し、利用することによって。私たちを取り巻く環境が、こんなふうに、私たちの差異を私たち自身の利益のために、他者を犠牲にして、道具として、武器としてさえ用いるよ

う、促していることによって——。私たちはあまりに容易に、あまりに性急に、お互いに痛みや恐れを突き付け合っています。まるでそうすることに自分たちの生存の様態がかかっているかのように。まるで違いがあるというただそれだけで、実存的な脅威であるかのように。本日の私の願いは、私たちのあらゆる差異を横断して、お互いに対する未来の取り組みをより幸福なものにできるかもしれない、歴史的、概念的な地図を提供することです。

私は、公開のフォーラムでお話しするのだということ、聴衆のほとんどはジェンダー・スタディーズの専門家ではなく、トランスジェンダー研究にあまりなじみがないうということ、念頭に置いてきました。したがって、私たちが今日「トランスジェンダー」と呼んでいるものに関する概念と議論の歴史を、これまでに刊行された著作に部分的に依拠しながらたどるにあたって、専門家がすでに知っていることをたびたび繰り返すことになると承知しています。同時に、私は一般の方々にとってはなじみがなく、抽象的か、退屈だという印象さえ与えるかもしれないようなものの考え

方について、お話しすることになるかもしれないと思っています。私の不安は、もちろん、どちらの聴衆の方々も満足させることはできないだろう、ということです。しかしながら、私の願いは、これらの対極的なニーズの間の「スイート・スポット」が見出されているということであり、私が言わねばならないことが、翻訳の過程で不可避免的に失われないということです——というも、その多くが、この文脈では外国語の言葉が意味していることにかかっているのですから。

「トランスジェンダー」が、言葉として、かつ概念として、どのように旅してきたのか——20世紀半ばから今日に至るまで、この概念が記録からようやく復元されはじめている無名の場所から、いかにして現在、世界規模の文化・政治闘争の論争的で競争的な中心点になっていったのかを通じて——、その四つのナラティブを簡単に描き出したいと思います。第一のナラティブは、様々なジェンダーをもつ人々が、いかにして「トランスジェンダー」という言葉を、この語の形容詞形や副詞形〔訳注：「トランスジェンダリスト」や「トランスジェンダラル」など〕とともに使いはじめたのかを語るものです。そうした人々は、この言葉が、自分たちに力を与えてくれると感じ、他者による定義に抵抗し、病理化と医療化に異議を申し立て、政治的なコミュニティの基盤を提供するような仕方自分たち自身を記述するために使いはじめました。第二のナラティブは第一のナラティブを包含し、トランスジェンダーが依拠している「ジェンダー」概念自体を物語るもの

であり、その英語圏のフェミニズム思想における展開と、1950年代および60年代のアメリカ合衆国を中心とする生物医学研究という系譜学的起源とをたどるものです。第三のナラティブは別の二つのナラティブを包含し、英語圏における「ジェンダー」概念が、いかにして「トランスジェンダー」を伴いながら20世紀後半に支配的であった冷戦と米国中心の新帝国主義的な世界秩序の一部として、トランスナショナルに流通しはじめたかを提示するものです。第四のナラティブは「ジェンダー・イデオロギー」なる概念を中心に回っており、ジェンダー概念の実際の歴史を陰謀論へと変貌させるのですが、この陰謀論においては、トランスジェンダーの人々はジェンダー概念的・政治的な破綻を示す最も重要な例であると想像されたり、女性や少女にとって本質的に暴力的な教義を唱導する極悪人であるとさえ想像されたりしています。私が主張するのはこれとは正反対です。英語圏における「ジェンダー」概念は、インターセックスやトランスセックスの人々の存在を説明し、囲い込み、消滅させようとする試みの中で形作られました。クィア、フェミニズム、反人種主義、反植民地主義、反資本主義といった社会変革運動の行路と並走し、交差しながら、トランスジェンダーの解放は、現在の世界秩序から離れ、私たちをより良い未来へと連れていってくれる行路を、いかにその未来が想像不可能で、到達不可能ですらあるかもしれないとも、示しているのです。

I. 「トランスジェンダー」という言葉の歴史

「トランスジェンダー」という言葉は、現在では半世紀以上の歴史をもっています。この見解から話をはじめるのは、「トランスジェンダー」が、一部の人が想定するように新しい社会現象を説明する新しい概念ではないという事実を強調するためです。むしろそれは、生物学にもとづく近代の二元的な観念、すなわち男性とは誰であり、女性とは何であるかということに関する観念を争い、越えるような社会的なアイデンティティと実践について思考するための確立した方法なのです。ジェンダーの多様性は歴史を越え、諸文化を通じてあまねく存在する現象ですが、「トランスジェンダー」はジェンダーの多様性を特定の仕方で概念化する特定の歴史から現れ、当初は英語話者の白人によって発展させられます。そうした人々はジェンダーの多様性を概念化する方法として、他の人種的、民族的、言語的な形態には通じていませんでした。結果として、「トランスジェンダー」は特定の人種的、政治的、そして概念的な負荷を負っています。

現在、「トランスジェンダー」という言葉のいくつかのバージョンが活字で初めて現れたのは、1965年、ジョン・F・オリバーン(John F. Oliven)博士の『性の衛生と病理：医師と専門家のためのマニュアル』第二版(Oliven 1965)においてであるとされています。1915年にベルリンで生まれ、1938年にローマで医学の学位を取得したオリバーンは、第二次世界大戦後にニューヨークに移住し、そこで1948年にコロンビア大学内

科・外科学部の教員となり、コロンビア大学長老教会医療センターで精神科担当医として勤務しました。それは大病院への名誉ある任命であり、彼がエリート医療者であった証しです。彼の専門領域における標準的な参考書であったこの著作には、性的逸脱についての章が含まれています。そこには「原発性トランスヴェステイズム」についての節があり、続いて「トランスセクシュアリズム」についての項が存在していました。彼は以下のように説明しています(Oliven 1965: 514)。

脅迫的な衝動が女性の服装への衝動を越えたものに達し、ジェンダー(「セックス」)の転換への衝動になると、トランスヴェステイズムは「トランスセクシュアリズム」になる。この用語はミスリーディングである。実際には、言わんとされているのは「トランスジェンダリズム」ということだ。なぜなら、原発性トランスヴェステイズムにおいて、セクシュアリティは大きな要因ではないからである。

オリバーンの簡潔な記述は、別個のものでありながら結合された「セックス」と「ジェンダー」という概念を中心に展開しているのですが、その手法は本講演における第二のナラティブの焦点となります。第二のナラティブは、いかにフェミニズムが自らの目的のために「ジェンダー」概念を盗用し、展開したかということに関わります。ですが、ここで取り上げるのは、ある重要な指摘をするためです。「トランスジェ

ンダリズム」が「トランスセクシュアリズム」の代わりとして精神病的病理学のテキストに現われてから実に2、3年のうちに、英語圏のセックス／ジェンダーの区別を巧みに使う他のいくつかの言葉が、通常の男性や女性のあり方から外れ、「トランスセクシュアル」という言葉の病理学的な含意に対抗したいと望んだ人々の著作の中に、登場しはじめました。1960年代半ばまでには、とりわけ1966年のハリー・ベンジャミン (Harry Benjamin) 博士の著書『トランスセクシュアル現象』(Benjamin 1966) の出版の結果、「トランスセクシュアル」という言葉は診断カテゴリーとして、すなわち一方通行で、一度きりの、手術とホルモンを手段とする男性から女性へのジェンダーの二元論の移行を求めるといふ医学の言説として、確固たるものとなりました(女性から男性への移行は比較的まれだと考えられていました)。この文脈で、「トランスジェンダラル」「トランスジェンダリスト」「トランスジェンダリズム」のような言葉が、一時的に異性装をする男性と、医療的手段によって身体を恒久的に変える男性から女性へのトランスセクシュアルという安易な区別を拒んだ人々——特に、ヴァージニア・プリンス (Virginia Prince) やアリアドネ・ケイン (Ariadne Kane) ——によって使われはじめました (Hill 2013)。早くも1969年には、プリンスはこう述べていました。「私は、少なくとも、セックスとジェンダーの違いを知っているのだし、前者ではなく後者を変えることに決めたのだ」(Prince 1969: 65)。

アイデンティティないし社会的な役割と

しての「ジェンダー」と、生物学的な生殖能力としての「セックス」の区別を可能にすることによって、「トランスジェンダー」の利用範囲は急速に広がりました。早くも1975年には、特にトランスセクシュアルやトランスヴェスタイトのグループや組織のニューズレターにおいて、様々なジェンダー非順応 (gender non-conforming) のアイデンティティを包含する包括的な用語として「トランスジェンダー」が用いられている例が存在します。1980年代半ばまでには、後にアメリカ合衆国でそうした人々のためのもっとも有名な全国的雑誌となる *TV-TS Tapestry* が、読者たちについて話すために「トランスジェンダー・コミュニティ」という言葉を使いはじめていました (Williams 2012)。1991年には、ホーリー・ボスウェル (Holly Boswell) という名前のトランスフェミニンでジェンダー非順応の人が、コミュニティ誌である *Chrysalis Quarterly* で、異なる種類の異なるジェンダーをもつ人々の間のアイデンティティをめぐるつまらないけんかを越えるため、彼女が言うところの「トランスジェンダーというオルタナティブ」について書きました (Boswell 1991)。幅広いジェンダー非順応の人々による「トランスジェンダー」の受容が、心理学・医学の専門家がこの語を放棄した時と一致していたことは重要です。「トランスジェンダー」は、正式な診断カテゴリーの名称には含まれず、代わりに医療的な手段による身体変化の欲望を含むかもしれないし含まないかもしれない、ほとんどもっぱら自分自身によってのみ用いられる記述用語となったのです。この二重の

変化——診断から離れ、自己定義へ向かうという変化——が、「トランスジェンダー」が1990年代初期に一気に爆発的に可視化されることになるのかという条件を設定したのです。

「トランスジェンダー」の歴史において、1992年のレスリー・ファインバーグ (Leslie Feinberg) のパンフレット『トランスジェンダー・リベレーション：運動の時が来た』の発表は画期的な出来事でした (Feinberg 1992)。2014年に、死の床において「革命的共産主義者」(Childs 2014) として記憶されるよう求めたファインバーグは、今日であればノンバイナリーと呼ばれるかもしれない人でした。ファインバーグはジェンダー・ニュートラルな代名詞を用い、初めは医療的手段によって女性から男性へと移行したのですが、後によりあいまいなジェンダーで生きるために、部分的に移行を巻き戻しました。ファインバーグは「トランスジェンダー」を包括的な意味で用い、ジェンダーによって抑圧されるすべての人々を包含させました。そして「トランスジェンダー・リベレーション」を、資本主義的な異性愛的家父長制を終わらせようとするマルクス主義フェミニズムのアジェンダの一部と考えていました。ファインバーグによる「トランスジェンダー」の政治化は、同時代に台頭してゆくいわゆる「クィア」アクティヴィストたちの世代で特に影響力を持ちました。AIDS危機の時代に大人になったそうしたアクティヴィストたちは、ゲイやレズビアンのような、狭いアイデンティティ・ベースのラベルだと自分たちがみなしたものを拒絶し、構造的

なホモフォビアと異性愛主義に狙いを定めたラディカルな反アイデンティティ・ポリティクスに賛同していました。「トランスジェンダー」は、異性愛主義が依拠する男性と女性のカテゴリーを混乱させるものであると考えられたために、「クィア」という参照枠組みの中に急速に取り込まれることになりました。とはいえ内的な緊張関係がなかったわけではありません。というのもホモセクシュアリティもまた、ヘテロセクシュアリティとまったく同じジェンダーのカテゴリーに依拠しているからであり、トランスジェンダーはしばしば、ホモセクシュアリティにおける男性と女性の定義をも同様に混乱させるものであるとみなされたからです。

1990年代半ばまでに、インクルージョンとダイバーシティというネオリベラリズムの論理が反抗的なクィアネスを飼いならし、より同化主義的なLGBTという社会的編成へと変化させていったのにしたがって、「トランスジェンダー」は英語の語彙として一般的になっていきました。とはいえ、この言葉が自分たちのアイデンティティの固有性を消去すると考えた一部のトランスセクシュアルの人々からの反対がなかったわけではありませんでした (Williams 2012; Beatty 1995)。それにもかかわらず、AIDS 予防措置に資金を出していた国際的な人権機関やNGOに採用されたことを通じて、「トランスジェンダー」という用語はグローバルに拡散されはじめ、アメリカ合衆国に起源をもつ地政学的な権力と文化資本によって後押しされはじめました——この展開の条件については、次の第

三のナラティブのところで手短かに議論するつもりです。主流化の結果「トランスジェンダー」は、世紀転換期までには男性と女性のカテゴリーの混乱という政治的含意だけではなく、狭く解釈され、病理化されたトランスセクシュアリティに対する包括的なオルタナティブとしての意味の大部分をも失いました。「トランスジェンダー」は実際のところ、かつてトランスセクシュアリティが意味していたもの——二元的なジェンダーのうち的一方からもう一方への医療的な移行——と概ね同じものを意味するようになったのであり、何十年もの間「トランスジェンダー」が包含していたノンバイナリー、ジェンダー・フルイド、ジェンダーキアといったアイデンティティとは対照的なものとなったのです。それによって、「トランスジェンダー」は、ジョン・オリヴァン博士が説明していたもともとの問題へと旅路を戻っていったとみなすことができるでしょう。そこでは彼は、「トランスジェンダリズム」を「トランスセクシュアリズム」の代わりにすることを提唱していたのです。これは皮肉にも、もしくは逆説的にも、長い時間をかけて概念的な発展を遂げたあとで、最初の状態へと逆戻りしたかのように初めは見えるかもしれませんが、私はそうではない仕方での現象を最もよく理解できると主張します。すなわち、「セックス」と「ジェンダー」という磁極の間の揺れ動きとして——一方における身体の物質性と、他方における社会的なカテゴリー化の間の揺れ動きとして、時間による直線的な進歩ではなく諸変数の中の流転として、潜在的な可能性、顕

在化する現象、動的で不安定な領域の中で形作られる出来事と対象の揺らめき、絶え間なく変化する性質として——理解できるのです。実は、フェミニスト的な社会分析と文化理論において、まさにこのような概念化がなされました。人類学者であるゲイル・ルービン (Gayle Rubin) の「女性の交換」という1974年の論文を通じて、ジェンダーが取り入れられた導入地点です。そこでルービンが考案した「セックス/ジェンダー体制」という用語は、「社会が生物学的なセクシュアリティを人間活動の産物へと変容させる一連の編成」を意味していました (Rubin 1974)。「トランスジェンダー」の定義上の転換は、セックス/ジェンダーの区別という隔たりの中に開かれた概念的な空間に通じる曲がりくねった行路をたどっているのです。

II. フェミニズムにおけるジェンダーの精緻化とその生物医学的系譜

それでは、英語圏のフェミニズムによる「ジェンダー」概念の取り入れという、第二のナラティブに移ります。「ジェンダー」概念は「トランスジェンダー」の論理の基礎をなしていますが、英語圏のフェミニズムはそれを先ほど描写したような動的で不安定な現象の領野の地図として受け入れました。ある領野の言説空間を構成する二極的な用語のうち一つだけに依拠しながら、その領野の地図を描くことの内在的な困難に注意を払うなら、私たちはすでにフェミニスト的なジェンダー研究の核心にあるジレンマを、とりわけ生物学的な物質性への問いという格闘と、ホモ・サピエンスという

種が自らを再生産する性的二形性の含意を理解していることとなります。社会における女性の存在と従属的な場所の意味を性的な再生産能力という生物学的特徴に帰することへの政治的な反対から——還元論的な生物学的本質主義はセックス／ジェンダーの区別を認めず、代わりに男性と女性の差異という問いを生命科学の領域のうちに置き、社会科学と人文学の領域のうちには、あるいはこうもいべきでしょうが、女性として生を生活している人々の知識と経験のうちには置かないわけですが——フェミニスト的な社会分析は戦略的に他の方向へと、生物学的なものの意味を変容させ配置する「人間活動」へと向かったのです。

フェミニストの歴史家であるジョーン・スコット (Joan Scott) は、1986年の画期的な論文「ジェンダー：歴史分析の有効なカテゴリーとして」において、いかにフェミニストが「ジェンダーを、両性間の関係性の社会的な編成を指示するために近ごろ使いはじめた」(Scott 1986) かに言及しました。彼女はこの戦略的な転回の当時10年に及ぶ歴史に二つの異なる方向からアプローチしました。第一に彼女が語るのは、ゲイル・ルービンのようなフェミニストやその追隨者が、いかに「ジェンダー」に階級や人種に類するような分析概念を見出したのかという社会的・政治的な物語であり、いかにその分析概念を客観的な社会科学という権威のmantに覆い隠されている専門的な知識を発展させ、アカデミアにおける自分たちの存在を正当なものとし、自分たちの研究が単なるフェミニストの論争にすぎないという批判をかわし、伝統的な男性の

領域において女性でありながらプロフェッショナルとしての地位を主張することのできる概念として見出したのかという物語です。ジェンダーは、言い換えれば、フェミニズムの視角をアカデミックな制度に制度自身の枠組みで持ち込むというプロジェクトに有用な概念だったのです。スコットの論文は続いて、「ジェンダー」が果たすことを求められているような知的な仕事へと向かいます。「ジェンダー」は、様々な社会と長期にわたる女性の抑圧の歴史的發展を説明するのに有用であると考えられました。また女性性を、独立した地位としてだけではなく、それがたいていは従属させられている男性的な地位との関係において研究するための分析的な道具であると考えられ、もしかすると最も重要なこととして、男性と女性の関係の特徴づける権力関係について思考する手段であると考えられました。フランスの文化理論家であるモーリス・ゴダリエ (Maurice Godelier) とミシェル・フーコー (Michel Foucault) の洞察を引きながら、スコットは、社会的な実践としての「ジェンダーは、まずもって権力を正当化する手段である」(Scott 1986: 1069) と主張し、いかにしてセックスの差異がセックスそのものとは何の関係もない社会的な取り決めのための証言形式として呼び出され、反対にあれこれの命題において、一方の優越性を補強して他方を犠牲にするような証拠として徴用されるのかを、説明しています。

ジェニファー・ジャーモン (Jennifer Germon) が有益な研究書『ジェンダーの系譜学』(Germon 2009) で指摘しているよう

に、「ジェンダー」概念は、少なくとも英語圏において、存在論的なもの——存在そのものの一部分、何か単純に存在しているもの——に見えるほどに自然化されました。実際にはジェンダーという概念と、セックスとの区別は、驚くほど最近の歴史上の発明なのですが。その歴史のほとんどにおいて、ジャーモンが指摘しているように、「ジェンダー」は文法上の概念であり、「人と人ではなく、言葉と言葉の関係に印をつけるものだった (Germon 2009: 1)」。ジョン・スコットのジェンダーについての論文は、最初に古い辞書の定義を引用していますが、そこでは「ジェンダー」は、正しくは文法上の意味しか持たないものとして定義され、恣意的な集合に属する言葉がみな似たように修飾される仕方を指しており、「セックス」を意味する「ジェンダー」の日常的な用法は、「滑稽であるか、さもなくば失敗」(Scott 1986: 1053)であるかのどちらかでした。文法からジェンダーという概念を借用することで、人間の社会活動がいかにして「生物学的性(セックス)」に働きかけて、文化的に特定の人間の種類やカテゴリーへと作り変えるのかを語ることによって、ある一連の連想がもたらされました。セックスに属する「もの」と、それを表象するジェンダーに属する「言葉」との関係性には多くの可能性がありうるという考えがもたらされたのです。文法的には、ジェンダーとは本質的に、任意の言語において言語的な表象や表現の諸要素を変換するときに、何が許容可能で何が許容不可能な形式であるかを定める規則のことです。文法上のジェンダーは、すべての言語に共通し

て特定の数が存在するということはありませんし、新しい文法上のジェンダーの誕生や、ジェンダーの不在も想像可能です。言葉の集合を文法的にどのようにまとめ上げるかが本来的に恣意的であることは、「トランスジェンダー」がフェミニストの関心事としてあらわれるための条件をなしています。というのも、同様の恣意性が、言葉自体からなる文法の中で表象される事物にも等しく当てはまるかもしれないという含意があるからです。

文法上のジェンダーは、1970年代と80年代の人文科学と社会科学におけるより広い「言語論的転回」の中で、男性と女性の関係性の変容可能性を理解するためのモデルとして、さらにはこれらの人格的なカテゴリーがいかにしてそれ自体変容されうるかを理解するためのモデルとして受け入れられました。「言語論的転回」は、フェミニズムにおいて「トランスジェンダー」を登場させるための扉をさらに大きく開きました。なぜならば、部分的には、主にポスト構造主義的な文化理論を通じてますます大きく取り上げられていた言語と表象に対するあらゆる関心が、「身体はどうなるのか？」という、やっかいな問いを提起する効果を持っていたからです。それは事実上、「抑圧されたものの回帰」を、すなわちセックス/ジェンダーの二分法において戦略的に無視された一端に取り組み必要があるというしつこい感覚を、表象していたのです。この文脈において、ジュディス・バトラー (Judith Butler) の記念碑的な著作『ジェンダー・トラブル』(Butler 1990)と『問題=物質化する身体』(Butler 1993)が1990年

代初期に出版されたわけですが、どちらも異なった力点を持ちながら、フェミニスト的な探求を構造化しているセックス／ジェンダーのそれぞれの極を扱っていました。どちらの本も、トランスジェンダー現象に大きく取り組んでおり、「ドラァグ」をジェンダーのパフォーマティヴィティそれ自体のモデルとして位置づけ、バトラーが『『セックス』の言説的限界』(Butler 1993)と呼ぶものを探求するために、トランスセクシュアルを利用していました。バトラーの著作を通じて初めてトランスジェンダー的な内容に触れた人々が、トランスジェンダーがこのとき初めてフェミニズムの問題として現れたのだと考えたことは、やむを得ないかもしれません。そうした人々が、「トランスジェンダー」を、フェミニズムとクィア思想における特定の傾向の加速を象徴するものだと考えたことですら、やむを得ないことかもしれません——すなわち、身体の意味、重要性と社会的な帰結を完全に放棄してしまうかのようにイメージされた、ポストモダンで、脱物質化された、行きすぎた言語論的転回の加速を象徴するものとして。この方面の考え方は、実は私があとで手短かに探究する「トランスジェンダー」の旅路の第四のナラティブ、すなわち「ジェンダー・イデオロギー」陰謀論の中に入り込んでいます。ですがここで認識すべき重要な点は、私が示してきたように、フェミニズムにおける「トランスジェンダー」の重要性は、1990年代初期よりもずっと前にさかのぼることです。「トランスジェンダー」は実はセックス／ジェンダーという問題系それ自体に内在す

るものであり、その系譜はフェミニズムにおいて分節化されるよりも前にさかのぼることができるのです。

ジョーン・スコットは、「ジェンダー」概念のもつ正当化権力を社会科学に帰しました。しかしながら、1980年代以降の数十年にわたる研究が明らかにしてきたことは、言葉のカテゴリー間の関係性を理解する手段であった文法上のジェンダーを、人間の種類と関係性を理解するための道具に作り変えたと評価されるべきは、特に臨床心理学と内分泌医学、ないしより一般的な性科学だということです。この概念上の発明は、最初はジョン・マネー (John Money) と、ジョンズ・ホプキンス大学の同僚であるジョーン・ハンプソン (Joan Hampson) とジョン・ハンプソン (John Hampson) の著作に登場しました。彼らは1955年から1957年の間に身体的なインターセックスの状態をもって生まれた人々におけるアイデンティティの発達に関する研究を出版しました。のちにこの概念上の発明は、1960年代に男性から女性へのトランスセクシュアルにおけるアイデンティティの発達についての研究を行ったカルフォルニア大学ロサンゼルス校のロバート・ストーラー (Robert Stoller) の著作にも登場しました (Meyerowitz 2002: 114-8)。

マネーとハンプソン夫妻は、変則的に発達したセックスをもって生まれた人々が、身体が物理的にあいまいで、性器が明確には男性形でも女性形でもないのに、いかにして自分自身を男性や女性と考えるようになるのかを理解したいと思っていました。彼らの研究が示していたのは、個人のアイ

デンティティと社会集団への帰属の感覚を決定しているのは身体的なセックスの肉身上的のマーカ―ではないということ、反対にこうしたアイデンティフィケーションは、心理社会的なプロセスの結果だということです。彼らが観察したような、一方にある生物学的要素と、他方にある自己の主體的な感覚および社会的なカテゴリー化との間の差異を記述するための言葉を探し求めた結果、彼らは数十年後のフェミニストと同じ理由で、「ジェンダー」概念を言語的な文法から借用しました。彼らが理解しようと試みていたのは、インターセックスの人々がいかにして男性や女性としての自己概念を発達させるようになるのか、というある特定のことでした。しかし、「ジェンダー」を生物学的なセックスとの区別をつけるために採用したことで、彼らの発見は一般理論へと適用可能なものになりました。彼らの概念化において、すべての身体は男性、女性またはインターセックスのいずれかであり、身体はその後に、男性または女性としての「ジェンダー・アイデンティティ／役割」をもつ人間になってゆくのだと考えられました。インターセックスについてのこの概念化に付け加える形で、精神科医のロバート・ストーラーは、似たようなトランスセクシュアルの説明モデルを発展させました。彼が理解するところによると、トランスセクシュアルは男性、女性またはインターセックスとしての身体的なセックスと、それとは一致しない男性または女性としての主體的なジェンダー・アイデンティティをもち、割り当てられた役割とは異なった社会的なジェンダー役割で生きるこ

とを望むものです。この研究もまた、すべての人間の範例として提示されています。トランスセクシュアルにおけるセックス、ジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー役割の不一致だけが、すべての人間の人格を特徴づけるこれらの要素を可視化させるのです。ストーラーは1964年までにこの基本的な主張の概要を示す論文を公開したのですが、まさにこの一連の著作こそ、ジョン・オリヴァンが翌年、「トランスジェンダリズム」のほうが「トランスセクシュアリズム」よりも正確な用語であろうと主張したときに、参照していたものでした (Meyerowitz 2002: 115-8)。

「ジェンダー」の系譜をさらにさかのぼってゆくことによって、このように、「トランスジェンダー」はフェミニズム理論に最近付け加えられたものではまったくないということが示されます。実際にはこの問題こそが、言葉を説明するためにのみ用いられる「ジェンダー」から、あらゆる人々の根本的な側面を説明するために用いられる「ジェンダー」へという移行の、最初のきっかけになりました。トランスとインターセックスの人々が現に存在しているということが、消化することのできない砂粒であり、セックス／ジェンダー体制は、それを囲い込み、ならそうとする隠れた真珠でした。私たちが実際に存在するということが問題を上演し、その問題を解決するためにジェンダーが発明され、その上に、ジェンダー・スタディーズという領域が、続いて設立されたのです。

Ⅲ. (トランス)ジェンダーのグローバル化

それではいかにして、この生物学的なセックスとは区別された人間のジェンダーという新しい概念が、アメリカ合衆国を起源とし、インド・ヨーロッパ語族における文法上のジェンダーとのアナロジーに深く根差しながら、20世紀後半にトランスナショナルに旅立ちをはじめたのでしょうか。これが、本日私が提示したい第三のナラティブです。この物語における最初の大きな出来事は、クリスティーヌ・ジョーゲンセンが前代未聞の世界的な有名人になったことです。ジョーゲンセンは、アメリカ生まれ、デンマーク系のトランスジェンダー女性であり、1952年にコペンハーゲンで性器の変容手術を受けたとき、世界中で大見出しのニュースになりました。彼女の話題は、その年で単独一位のニュース・ストーリーとなったほどでした。朝鮮半島での戦争、イギリスでのエリザベス女王の戴冠や、太平洋での水爆実験よりも多くの言葉が、彼女について印刷されたのです。彼女の評判をめぐる突発的な光景と、それに続くエンターテイナーとしてのツアーを通じてこそ、世界中の人は、当時の医学文献においておぼろげながら存在していたホモセクシュアル、半陰陽者とトランスヴェスタイトの違いを知ったのです。そして1954年には、ジョーゲンセンが体現したような、医療的手段によってカテゴリーを越境する人を指す新しい用語である「トランスセクシュアル」を知ったのでした（ただし、ジョーゲンセン自身はこの言葉を好んでおらず、早くも1960年代には「トランスジェンダー」のほうが好ましいと発言していた

ことが記録されていることは、注意すべきでしょう）（Stryker 2017: 65-8; Williams 2012）。ここでの要点は、ジョーゲンセンの物語が国際的にメディア化されたことによって、身体的な差異と、欧米中心の概念に根差した人格のカテゴリーとの関係を認識する特定の方法が聴衆に教え込まれたということであり、その教育によって、「トランスジェンダー」は地政学的に重要なトピックになったということです。

例えばジョーゲンセンをめぐる熱狂のさなかであった1953年、毛沢東が中国本土を支配し国民党政府を台湾へと追いやってからわずか4年後に、台湾メディアは興奮しながら、インターセックスの状態をもち、男性として生きていたシエ・ジエンシュー（Xie Jianshu）という名前の人物を現地の医師たちが発見したということ、そして医師たちが——メディアの言うところでは——手術によって女性に変えたということ、報道しました。シエは「中国版クリスティーヌ」と呼ばれました。そして歴史家のハワード・チャン（Howard Chiang）が明らかにしたように、彼女の事例は、まさに西洋生物医学的なセックスの認識論を熟知していることを成功裏に披露し証明することを通じて、西洋志向の台湾ナショナリストの中国本土に対する優越性を示す重要なアリーナとなったのです。似たような物語があらゆる場所では出現し、そうした物語は基準となったジョーゲンセンの物語との関係において、科学的な近代性を遂行できることの証明となりました（Chiang 2018: 248-54）。

反対に、ジョーゲンセン自身が登場し

ている1962年のフィリピンのコメディ映画 *Kaming Mga Talyada* (Cayado 1962) は、ジョーゲンセンによって形作られたトランスセクシュアリティの概念が、いかにして模倣ではなくナショナリスト的な抵抗の場ともなりうるのかを記録しています。マニラのナイトクラブでのジョーゲンセンの延長公演を利用して書かれ、制作されたこの映画では、夫に捨てられた無節操な母親が7人の息子に *talyada* になるよう働きかけます。*talyada* は *bakla* の婉曲表現で、出生時に男性を割り当てられた女性的な人々を指すフィリピンの伝統的なジェンダーであり、女性的なホモセクシュアリティとして理解されることもあれば、トランスジェンダー的な女性性として理解されることもある言葉です。母親の目的は息子たちが決して結婚せず、代わりに自分をずっと世話してくれるようになることです。彼女は息子たちを楽しませようとナイトクラブに連れていき、クリスティーヌ・ジョーゲンセンのパフォーマンスを見せます。それに感化された彼女は、ジョーゲンセンのような女性になってエンターテイナーとして儲けられるよう、息子たちを海外に送って性器の手術を受けさせようとします。母親の計画は、彼女の子供たちと結婚したいと願い、息子トランスに変えようという試みを邪魔しようとする7人の若い女性たちによって複雑なものとなります。それから展開する複雑なプロットは、*talyada* であることと「トランスセクシュアル」であることの違いを中心としています。問題になっているのは、セックス／ジェンダーの身体化をめぐる二つのバージョンが通約不可能だという

ことです。*talyada* は男性の女性性の非医療的な表現を表象し、その女性性は兵役、結婚、生殖と両立可能で、したがってフィリピン国民を再生産する能力があるのに対して、「トランスセクシュアル」は本国アメリカと結びつけられた魅惑的な展望として理解されていますが、女性的な男性身体の再生産能力を破壊し、結婚と兵役に不適当な身体へと変えてしまうために、究極的にはフィリピンのナショナリズムとは両立できないものです (Stryker 2013)。これもまた、「トランスセクシュアル／トランスジェンダー」のような概念を下支えするセックス／ジェンダー体制が、そのグローバルな旅路においてつねに歓迎されてはこなかったこと、むしろ既存の社会的な編成と人格の形式を破壊するものとして認識されてきたことを語る、よくある物語です。

ジョーゲンセンによって形作られたものとしてのトランスセクシュアリティは深く人種化された概念であり、英領北アメリカ植民地とアメリカ合衆国の奴隷制の長きにわたる残滓に負っています。この歴史の一つの遺産は、肉体に繋ぎ止められた純粹で画然たる人格のカテゴリーという文化的なファンタジーであり、そうしたカテゴリーへの欲望であるとしか言えないものです。このファンタジーにおいて、生物学的差異は階層的に秩序づけられた社会的カテゴリーを作り維持するための道具となるのであり、その純粹さと明瞭さは二元論にしたがって厳格に執行されなければなりません。少しだけ自由で少しだけ奴隷であるということはできないので、少しだけ黒人であるということはできない

のです。現実に存在している人種化された生物学的差異のスペクトラムは、超法規的な暴力を通じて、さらには異人種間結婚の正式な禁止、すなわち異人種の血筋が少しでも混ざっている者を白人ではなく黒人として定義する「血の一滴」^{ワンドロップ}ルールを通じて、二元論の中に押し込められなければなりませんでした。混血性と雑種性は何としても破壊され、否定され、もしくは困り込まなければならないものであり、さもなくば人種的な奴隷に依存した政治経済は——そしてその余波において継続した人種的マイノリティの搾取は——ある程度までは機能しませんでしたし、もしくは利益を上げ続けられなかったのです。身体的差異に意味を付与するこの人種的論理は、他の階層化された二元的カテゴリー、例えば男性／女性、ホモ／ヘテロのような、同様に生物学的差異にもとづく信じられているカテゴリーに関する信念のテンプレートをもたらしました。この図式の中においては、誰かが少しだけゲイで少しだけストレートである、少しだけホモセクシュアルで少しだけヘテロセクシュアルである、ということ想像するのは困難です。しかし実際には、そうした認識や概念は、「本当は何であるのか」「『これかあれ』のどちらであるのか」という問いがかつてないほど切迫性を帯びているヨーロッパ中心主義的な近代性と比較して、歴史を越え、諸文化を通じて、例外というよりは規則でした。こうした問いがトランスジェンダーの人々をめぐる位置づけのまわりを非常に密度で覆っているのは、まさに、私たちが二元的なアイデンティティ体制の論理を混乱させるためなの

です。

グレース・キュンウォン・ホン (Grace Kyungwon Hong) やロデリック・ファーガソン (Roderick Ferguson) のようなアメリカの人種研究者は、その魅力的な叙述において、第二次世界大戦後、アメリカ合衆国が新帝国主義的なグローバル・パワーとして疑いなく台頭し、異なった「人種資本」の形態を考案することを迫られたときに、人種がいかにして他の形態のマイノリティの差異をめぐる政治の性格を規定したのかを描いています (Hong 2006; Ferguson 2012)。アメリカ合衆国はヨーロッパ啓蒙思想の理想に根差した普遍的でリベラルな価値観を擁護することを通じて、20世紀半ばの名望を享受しました。ですが、「すべての人間は平等に造られているのであり、創造主によって生命、自由そして幸福追求を含む不可侵の権利を与えられている」というその理想は、人種的マイノリティに対しては体系的に否定されていましたが、人種的マイノリティの奴隷労働と搾取は、資本蓄積の主要な手段として機能していました。1945年のあとには異なった状況に直面しました。ソビエト連邦との冷戦が固定化された一方で、同時にアメリカ合衆国は、アジア、アフリカやラテンアメリカにおける、ポストコロニアルで反帝国主義的な、国民的な自己決定を求める革命的情熱とたたかいました。そして国内では、新しい種類の社会運動に次々に直面することになるのですが、そうした社会運動はしばしば第三世界解放闘争と連帯していました。それは、最初は黒人の間で、次にブラウンの、アジア系の、そしてネイティブ・アメリカンの人種

的マイノリティの間で起こり、最後には女性の、クィア／トランスの人々の、そして障害者の間で起こったのです。解放、自由そして正義を求める古い闘争が、普遍的な価値観を実現し、体現することを基礎としてたたかわれたのだとすれば、新しい闘争はアイデンティティの領域でたたかわれることになりました (Ellison 2017: 4-5)。アメリカ合衆国において、最初のトランスの政治的闘争の事例が起こったのは、1950年代後期から1960年代後期の間のこれらの運動の文脈の中であり、ロサンゼルス、サンフランシスコ、フィラデルフィア、ニューヨークの、様々な人種からなる市街地における、警察に対する抵抗と、差別に対する抗議においてであるとされています。そこではトランスの人々は、クーパー・ドゥ・ナット、ドゥーイズ、コンプトンズ・カフェテリアやストーンウォール・インのようなバーやレストランに集まっていた (Stryker 2017: 79-98)。

これらの多数の闘争に呼応して、米国後援の新しい人種資本の形態が形成されたのですが、それはリベラルな普遍主義ではなく、ネオリベラルな「差異のマネジメント」モデルにもとづくものでした。そのモデルは全般的な支配戦略の一部として、異種混濁性を吸収する能力によって、そして以前は周縁化され抑圧されていた人々を、ときに抱え込み、ときに抱擁から排除する権力の手練手管によって、特徴づけられたのです。あらゆる差異を普遍的なものに向けて規律化することよりもむしろ、この新しい戦略が際立たせたのは、差異の増殖と、絶え間なく変化する権力の策略の中で二つ

の差異をたたかわせて漁夫の利を得ることでした (Ferguson 2012: 42-9)。セックス／ジェンダーの区別を分節化することによって、セックス／ジェンダーの区別がもつ、つねに新しく現れ続ける個人的・集合的アイデンティティの形態を名づけ、増殖させる可能性とともに、この新しい権力の様態に有力な概念的な道具が供給されたのです。「トランスジェンダー」が、主に国際的な人権と医療に従事する NGO を通じてトランスナショナルに流通しはじめたとき、それは部分的には、米国が支配するグローバル化のプロセスの核心にあるネオリベラルな差異のマネジメント・モデルを伸長する乗り物として、流通していたのです。

IV. 「ジェンダー・イデオロギー」におけるトランスジェンダーの役割

このことは、「トランスジェンダー」の旅路における第四の、そして最後のナラティブへと、私たちをついに導いてゆきます。そのナラティブとは、「トランスジェンダー」がいかにして、新しい地政学的な融合体——民族主義的で、排外主義的で、反グローバリズム的で、ますます原理主義的で反動的になっている運動や風潮の融合体——の中で出現しつつある陰謀論の一部として機能するようになったのかというものです (Case 2019)。過去75年あまりの地政学的なシステムが、西洋における古典的なリベラリズムの崩壊と、ネオリベラリズムの台頭によって特徴づけられるとしたら、いま形作られつつあるように見える世界システムにはいまだ名前がありません。しかしながら、どこで現れはじめているかを問

わず、そのおおよその特徴を認識することはできます。ドゥテルテのフィリピン、モディのインド、プーチンのロシア、オルバンのハンガリー、ボルソナーロのブラジル、ブレクジット危機のさなかのイギリス、そしてドナルド・トランプの下のアメリカ合衆国。これらのそれぞれの文脈において、「ジェンダー」は、エリートや世俗的な西洋の価値観によって人々の伝統的な道徳性を損なう、招かれざる「有毒化」を意味するようになっていきます。それは不道徳なホモセクシュアリティを媒介するものであり、また、自然や神によって認可された男性と女性の相補的な役割ではなく、両性が同一で交換可能だという偽りの観念を推進するラディカル・フェミニズムを媒介するものであるとみなされています。最も危険なことに、このジェンダー・イデオロギーが頂点に達するのはトランスジェンダリズムにおいてである、すなわち性別の変更が可能で、性別を変更しようとする人々に法的保護が与えられるべきだという馬鹿げた信念においてであると考えられています。現在のローマ教皇、フランシスコは、トランスジェンダーの人々を核兵器になぞらえるに至っており、そこではトランスジェンダーの人々は、生物学的な再生産能力の破壊を望ましき善の位置へと昇華させるという倒錯によって、地球上の生命を根絶する態勢にあるのです (McElwee 2015)。さらにより有害であるのは、トランスジェンダーの人々がますます、誤ったシステムの哀れな傀儡や犠牲者としてだけでなく、システムの暴力の加害者として、位置づけられるようになってきていることです。トランス

ジェンダーの人々は、女性専用スペースへの分不相応なアクセスや、分不相応なニーズのための公的基金へのアクセスを要求することによって、女性や少女に危害を加え、他のみんなのために機能している常識的な社会秩序を、奇妙にも倒錯した自己認識によって転覆しようとしているとして、告発されています。そうした信念の名において、トランスジェンダーの人々は善、真実、道徳、そして理性の名の下に、狙い撃ちされているのです。

アメリカ合衆国、ヨーロッパ、オーストラリアとニュージーランドの私が知るアカデミックなフェミニストたちのほとんどは、トランスジェンダーの人々を、自分がそうであると実感するジェンダーで、そのジェンダーにおける完全な人権と公民権とともに、承認することを支持しています。にもかかわらず、残念なことに、フェミニズムの中には近年のトランスの生の悪魔化を不幸にも強化することに加担するような傾向が存在してきました。最も残念であるのは、しかしながら、不当で脅威をもたらすトランスジェンダー女性、という今日の形象が最初にでっちあげられたのが、相当程度、初期のレズビアン・フェミニズム分離主義の中のある特定のトランスフォビクな傾向に属する人々によってであった、ということです。トランス女性は本質的に強姦者であり、望まれないのに女性のスペースに押し入る存在だ、という比喩が最初に現れた文脈は、トランスセクシュアル・レズビアン・シンガーであるベス・エリオット (Beth Elliott) の、西海岸レズビアン・カンファレンスへの参加において

です。このカンファレンスは1973年、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催されました。このとき、ガター・ダイクと呼ばれた分離主義グループが彼女の存在に異議を申し立て、基調講演者であったロビン・モーガン (Robin Morgan) が、それを増幅しました。そこからカルチュラル・フェミニストのネットワークを通じて拡散し、1979年、ジャニス・レイモンド (Janice Raymond) によって最初に、陰謀論として完全に展開されたのです。彼女は『トランスセクシュアル帝国』(Raymond 1979)で、トランス女性は医学的家父長制によって構築され、内側から女性運動を混乱させるために送り込まれる人工物だと想像し、トランス女性は「消滅を道徳的に命令され」るべきであると主張しました (Stryker 2017: 127-38)。レイモンドが捏造したトランスフォビックな陰謀は、数十年にわたってその時々でよみがえり、特筆すべき著作として、1995年にはバーニス・ハウスマン (Bernice Hausman) の『性の転換：トランスセクシュアリズム、テクノロジー、ジェンダーの概念』(Hausman 1995)、2014年にはシーラ・ジェフリーズ (Sheila Jeffreys) の『ジェンダーが痛む：トランスジェンダリズム政治のフェミニスト分析』(Jeffreys 2014)があります。とはいえほとんどの人は、この陰謀論は衰退に向かっていと想定していました。不幸なことは、トランスフォビックなフェミニズムが、この現れゆく政治的反動の時代に向かうポスト・ネオリベラルな流れと——それを何と呼びたいかはともかく——完全に合致したということです。セックス／ジェンダー体制がネオ

リベラルなグローバル化のための一連の道具の一部であったのとまったく同じように、トランスフォビックな「ジェンダー・クリティカル・フェミニズム」は、今起こっていることのための一連のイデオロギー的な道具を供給しはじめたのです。

きっとご存知のことと思いますが、2017年のブラジルで、フェミニズム哲学者のジュディス・バトラーの肖像が、彼女の招待講演に抗議して「おまえのイデオロギーなんてくたばってしまえ」と叫ぶ人々によって燃やされました (Jaschik 2017)。ボルソナーロの下で、武装した兵士がジェンダー・スタディーズの教室に突入し、脅迫しました (Fox 2018)。2018年には、中央ヨーロッパ大学にあるハンガリーで唯一のジェンダー・スタディーズ・プログラムが政府によって資金を打ち切られ、ユダヤ系ハンガリー人慈善活動家であるジョージ・ソロス (George Soros) に大部分支援されながら、反ユダヤ主義のパラノイアの波の中、大学自体が主なキャンパスをウィーンに移転することを余儀なくされました (Santora 2018)。英語圏では、いわゆる「オルト・ライト」の組織が、大学のキャンパスで破壊的な議論を上演するために「ジェンダー・クリティカル・フェミニスト」に資金を提供しています。そうした組織が期待しているのは、彼女たちが抗議を受けたり追い出されたりすることで、表現の自由の抑圧だという非難が加速されることです。このアカデミアの騒乱は、世界中の市民社会におけるトランスの人々への攻撃の高まりと密接に結びついており、その攻撃は、私たちの生を容易なものにする

政策や法律の巻き戻しと、私たちのあまりに多くを死ぬにまかせる超法規的な暴力との両方を通じて行われています。トランスジェンダーをめぐる問題が私たちの時代の中心的な問題の一つとなったことは、私にとって真に奇妙なことでありますが、フェミニストでクィアの歴史家として、いかにしてこの事態が出現したのかを、私は理解しています。私はトランスジェンダーであることを頼んだわけではないし、トランスジェンダーをめぐる問題が社会的な論争になることを頼んだわけでもありません。しかし、他者と並んで、他者とともに私の生を生きたいとただ思っているトランスジェンダーの人として、私が悟っているのは、

私たちはみな、不幸にもある時代を生きているということであり、そこではますます多くの私たちが、最も平凡な日常の行動において、何が私たちの真に重要な価値観であるかを示さなければならない立場に置かれているということです。私たちは、扉に立つ客人を迎え入れるのでしょうか、それとも恐怖と拒絶をもって反応するのでしょうか。私はこのうつろいゆく地政学的かつ歴史的な瞬間に、お茶の水女子大学がトランス女性の入学を認めはじめたことを、称賛したいと思います。この点についての意見交換を、これからしてゆくことになるでしょう。

謝辞

2019年12月15日にお茶の水女子大学にて開催された公開シンポジウム「トランスジェンダーが問うてきたこと——身体・人種・アイデンティティ」にお招きいただき、この原稿を基調講演として提供させていただいた申琪榮教授に感謝する。このシンポジウムは歴史について、トランスジェンダー・コミュニティがいま直面している現在の状況と挑戦について、フェミニズム・クィア研究の観点から扱うものであり、日本でもっとも古い女子大学のうちの 하나가社会的・主体的なアイデンティティとは異なった性別で登録されている女性の入学を認めはじめたこの歴史的な時に、開催された。同業である井谷聡子、清水晶子、石丸徑一郎、ナエル・バンジー (Nael Bhanji) と、また翌日のコロキウムに私たちとともに参加した学生たちと、このプラットフォームを共有し、フィードバックを頂けたことは光栄であった。旅程を詳細に詰めるという面白みはないけれども必要な作業のすべてに対して計り知れない助力をしてくださった本山央子、私の言葉を日本語で読めるようにしてくださる翻訳者、本発表を公刊へと導く手助けをしてくださった平野恵子、そして旅費と宿泊費を寛大にも援助し支援してくださったお茶の水女子大学と東京大学にも感謝する。

参考文献

- Beatty, Christine, 1995, "The 'T' Word", *TransSisters: The Journal of Transsexual Feminism*, 10: pp. 50-1.
 Benjamin, Harry, 1966, *The Transsexual Phenomenon*, New York, Julian Press.
 Boswell, Holly, 1991, "The Transgender Alternative", *Chrysalis Quarterly*, 1(2): pp. 29-31.

- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, New York, Routledge.
- . 1993, *Bodies That Matter: On the Discursive Limits of Sex*, New York, Routledge.
- Case, Mary Anne, 2019, “Trans Formations in the Vatican’s War on ‘Gender Ideology’”, *Signs: Journal of Women in Culture and Society*, 44(3): pp. 639-64.
- Chiang, Howard, 2018, *After Eunuchs: Science, Medicine, and the Transformation of Sex in Modern China*, New York, Columbia University Press.
- Childs, Ed, 2014, “Remember Me as a Revolutionary Communist”, *Jacobin Magazine*, (<https://www.jacobinmag.com/2014/12/leslie-feinberg-as-a-revolutionary-communist/>).
- Ellison, Treva, 2017, “The Labor of Werqing It: The Performance and Protest Strategies of Sir Lady Java”, In Reina Gossett [Tourmaline], Eric A. Stanley and Johanna Burton eds., *Trap Door: Trans Cultural Production and the Politics of Visibility*, Cambridge, MIT Press.
- Feinberg, Leslie, 1992, *Transgender Liberation: A Movement Whose Time Has Come* [Pamphlet], New York, World View Forum.
- Ferguson, Roderick, 2012, *The Reorder of Things: The University and Its Pedagogies of Minority Difference*, Minneapolis, University of Minnesota Press.
- Fox, Michael, 2018, “Education Is in the Crosshairs in Bolsonaro’s Brazil”, *The Nation*, (<https://www.thenation.com/article/archive/brazil-bolsonaro-education-repression/>).
- Germon, Jennifer, 2009, *Gender: A Genealogy of an Idea*, New York, Palgrave MacMillan.
- Hill, Robert, 2013, “Before Transgender: *Transvestia*’s Spectrum of Gender Variance, 1960-1980”, In Susan Stryker and Aren Aizura eds., *The Transgender Studies Reader 2*, New York, Routledge.
- Hausman, Bernice, 1995, *Changing Sex: Transsexualism, Technology, and the Idea of Gender*, Durham, Duke University Press.
- Hong, Grace Kyungwon, 2006, *The Ruptures of American Capitalism: Women of Color Feminism and the Culture of Immigrant Labor*, Minneapolis, University of Minnesota Press.
- Jaschik, Scott, 2017, “Judith Butler on Being Attacked in Brazil”, *Inside Higher Ed*, (<https://www.insidehighered.com/news/2017/11/13/judith-butler-discusses-being-burned-effigy-and-protested-brazil>).
- Jeffreys, Sheila, 2014, *Gender Hurts: A Feminist Analysis of the Politics of Transgenderism*, London, Routledge.
- McElwee, Joshua, 2015, “Francis Strongly Criticizes Gender Theory, Comparing it to Nuclear Arms”, *National Catholic Reporter*, (<https://www.ncronline.org/news/vatican/francis-strongly-criticizes-gender-theory-comparing-it-nuclear-arms>).
- Meyerowitz, Joanne, 2002, *How Sex Changed: A History of Transsexuality in the United States*, Cambridge, Harvard University Press.
- Oliven, John F, 1965, *Sexual Hygiene and Pathology: A Manual for the Physician and the Professions*, Philadelphia, Lippincott.
- Prince, Virginia, 1969, “Change of Sex or Gender”, *Transvestia*, 10(60): p. 65.
- Raymond, Janice, 1979, *The Transsexual Empire: The Making of the She-Male*, Boston, Beacon Press.
- Rubin, Gayle, 1975, “The Traffic in Women: Notes on the ‘Political Economy’ of Sex”, In Rayna R. Reiter ed., *Toward an Anthropology of Women*, New York, Monthly Review Press.
- Santora, Marc, 2018, “George Soros-founded University Is Forced Out of Hungary”, *The New York Times*, (<https://www.nytimes.com/2018/12/03/world/europe/soros-hungary-central-european-university.html>).

- Scott, Joan W, 1986, "Gender: A Useful Category of Historical Analysis", *American Historical Review*, 91(5): pp. 1053-75.
- Stryker, Susan, 2013, "*Kaming Mga Talyada* (We Who Are Sexy): The Transsexual Whiteness of Christine Jorgensen in the (Post)Colonial Philippines", In Susan Stryker and Aren Aizura eds., *The Transgender Studies Reader 2*, New York, Routledge.
- . 2017, *Transgender History: The Roots of Today's Revolution*, Berkeley, Seal Press.
- Williams, Cristan, 2012, "Transgender Timeline", *Cristan Williams*, (<http://www.cristanwilliams.com/2012/08/10/transgender-timeline/>).

